

ハイスクールD×D×V

夜叉音 鳳来

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

漫画版A p o c r y p h a 買って、前から書きたいなー思ってたヴラド三世をハイスクールD×Dの世界に入れちゃったストーリーを書きました！

え、FGOに艦これはどうしたって？必ず！必ず書き上げますから少々お待ちを！

これはかの串刺し公の末裔であり魂を共存させている少年の物語

喜劇となるか 悲劇となるかそれには誰にも分からない

では皆様方御照覧あれ・・・

批判？酷評？アンチ？ドンドン来なさいな

目次

プロローグ

第1話

1

旧校舎のディアボロス

第2話

9

第3話

19

プロローグ

第1話

〔ルーマニア某所〕

深い霧が覆う森

そこに置かれた小さなテーブルを挟み2人の男性が座っている。

1人は左目が無く代わりに魔術文字が浮かぶ水晶らしき物を嵌め込んでいる老人。

もう1人は漆黒の貴族服に身を包み、髪は白髪もとい金を薄くした色の髪を無造作に伸ばし毛先が青くなっている独特な髪の色をした男・・・というよりは青年と言った方が良いだろう。歳も10代半ば位だろうか。だがその佇まいは10代のそれでは無くいくつもの戦場を超えてきたかの様な強者のそれであった

「成程・・・良いだろう。その頼み聞き入れた・・・」

「ふむ、意外だったな。言つてはなんじゃがお前さんにメリットはほぼ無い様なもんじゃよ？それでも良いのか？」

「確かにこの話を受けても余にはなんの得にもならないだろう。」

国も違う、宗教も違う、思想も違う、別に守る必要のある領民達の家族な訳でもない。だが、例え何も理由が無くとも力無き者を護るべきは力を持ちし王だ。力を持つ貴族が何もしないなら串刺しにするだけだ。無能な蝙蝠が王を名乗るなら蹴落とすだけだ。化け物などと呼ばれようとも私は国民を護る為ならばいくらでも血を啜る卑しい吸血鬼バケモノへとなろう。

それが王というものだ。その覚悟を持たぬ蝙蝠に王を名乗る資格は無い」

「ククク・・・中々に狂つとるのお前さん。王とはいえ、他人の為にそこまでの自己犠牲の精神は狂気としか言えんぞ？」

「ふふ、知識の為に左目を捨てた者の言う言葉では無いな」

「それもそうじゃ」

ハハハと笑い合いながらテーブルに置かれた紅茶飲む2人

そして、段々と霧が晴れていきそこに現れたのは森では無く辺り一面の串刺しにされた蝙蝠の様な羽を持つもの、漆黒の羽を持つ者、純白の羽を持つ者様々な者が串刺しとなっていた

「にしても相変わらず容赦無いのお」

「何を言うか知識を追い求めた神よ。」

この者達が足を踏み入れた地を何処だとおもっている

—— 此処も

—— 其処も

—— 其処も

—— 彼処も

すべて

凡て

すべて

—— 我が領土であるぞ。

—— そこに足を踏み入れタダで済ます訳あるまい」

「我が領土って・・・お前さんの領土だった時代はもう500年近く前の話じゃろう

なあ、ヴラド三世」

ヴラド三世

ルーマニア最大の英雄

トルコ兵からは畏怖を籠めて串刺し公と呼ばれた彼は世界ではもう一つの異名の方

が遥かに有名だろうドラキユラ小さき竜公

・・・またはドラキユラ伯爵である

戦術とはえい敵の遺体を串刺しに掲げる血なまぐさい彼の所業は様々な伝説を呼び

後世の作家達の恰好の着想モチーフとなった

だが、彼はとうの昔に処刑されており今彼の遺体は修道院に置かれている筈である
「では、そろそろ私は失礼する。【彼】には簡単に伝えておいてくれればいい」

そう言うや否や串刺しにしてた槍が消え、死体が、勢い良く地面に叩きつけられる
「ん・・・ああ、オーデインさん話は終わりましたか？」

「うむ。お主には来年から日本のとある高校に入学して貰う。良いかの？」

「別に構いませんよ？」

「どうせ領主様が決めたんでしょう？なら自分に拒否権はありませんよ」

「それに日本には一時期居ましたから割と楽しみですよ」

「全く難儀じゃな」

末裔であり、魂を共存させてる者は」

【2年後駒王学園】

「待てえええええ!!変態トリオオオオオ!!」

叫びながらとある3人を追いかけてるのは色々なスポーツウエアを着けている女子の集団

そして、追いかけてられている3人は

「なんであそこで物音立てちまうんだよイツセー！」

「しょうがねえだろ！誰があんな所にブーブークツション置かれているって予想出来る
!？」

「とりあえず口を動かさないと逃げる事に専念しろおお!!」

「はあ・・・またやってるのかあの三馬鹿は・・・」

「走れ走れ走れえええ!!」

「後もう少して逃げ切れるぞおお!!」

「待て、あいつがいる!」

そこにいたのは薄い金色をした髪を無造作に伸ばした生徒だった

「あいつはルーマニアから来た頭脳明晰、運動神経抜群、性格はちよい悪だが偶に優しさを見せるからそのギャップでコロツと墮とされる木場と並ぶ駒王の二大イケメン!」

「通称駒王の吸血鬼!」

「ヴラド・デイウオーカー・霧仁!」

「モテない奴等の敵だ! やっちまえ!!」

「オオっ!」

「はあ・・・説明あんがとさん・・・んで、神妙にお縄につけ」

そう言うのと彼は先頭を走ってた兵藤一誠の頭を踏み

「俺を踏み台にしたあ!?!」

次に走ってた眼鏡にすかさず目潰し

この物語はそんな彼等のハートフル学園コメディである！
嘘である！！

旧校舎のディアボロス

第2話

「霧仁！俺彼女出来たんだよ!!」

さて、ここでこのSSを読んでるであろう数少ない読者の方々へ質問です。ある日突然見てくれは中の上くらいだが暇さえあればいや、暇がなくとも最近まで女子高だった高校の教室で大声で猥談をしたりAVやらウゝス異本やらを隠そうともせず広げたり挙句の果てに女子の着替えを覗いたりする女子の天敵でありスクールカーストの底辺に位置してるクラスメイトが突然こんな事を言ってきたらどうする？

しかも、前日に自分がそいつの頭を踏み台にしたり顔面に回し蹴りをしたりしたら？

「.....」スクツ

「ん？どうしたいきなり肩を掴んで？」

あ、まさか俺に彼女が出来たことに感動したあまゝ「すまない兵藤！本当にすまない！

俺が昨日クリボーよろしくお前の頭を踏んだり回し蹴りを繰り返したりしたせいで

「まさか本当に通常通りだったとは・・・」

「いや、何故そこで通常通りって言わない？」

「だって普段が正常じゃない」

「泣くよ？」

「勝手に泣けば？」

「うわああああああん!!!」

「うるさい」 回し蹴り

「理不尽!?!」

「で？俺に彼女がいると言って何がしたい？」

「い、いやちよつと明日デートするからどこに行けば良いかなっていうの聞こうと思つて……」

「知らねーよ」

「ニ〇コイでも読んでろ。あ、お前は一〇楽程モテないか。良くてせいぜいバー〇ツクだな」

「うるせーよ！そもそも何故ドラゴ〇ボール!?恋愛漫画ですら無いだろ!?!」

「良いじゃんドラ〇ンボール、恋愛も沢山だぞ。」

ちなみに俺は悟○×ブル○か、ヤム○ヤ×ブル○と想つてたらM字はげとくつついた事に驚きました。」※作者の個人的な意見です

「知らねーよ!?!いや、確かに俺も思つてたけどさ!?!そもそもドラゴンボー○で恋愛の話するの初めてだよ!」

「(お前が明日どんな風にやらかしてどんな醜態晒すか)オラ、ワクワクすつぞ!」(声真似)

「似てるけども!似てるけども絶対悟○みたいな純粹さで言つてない事だけは理解できる!絶対俺の不幸で愉悦を感じる的な事を思つてる!」

「良く分かつたな」

「当たつてやがつたよ!」

「ま、無難に映画とか行つたりシヨツピング行つたりすればいいんじゃないかね?俺は女とシヨツピング行こうとは思わないけどな」

「そうだよな・・・ありがとな!俺頑張つてみるよ!」

「おーうじゃーなー」

そう言つて兵藤は家に向かつて走つていった。その後彼の姿を見た者はいなかった・・・「物騒な事言うなよ!?!」

【翌日夕方公園にて】

《一誠 side》

「ねえ、イツセイ君一つ頼みがあるんだけど良いかな？」

「も、もちろん！何だって良いよ！」

そう言つて夕日をバックにした彼女はとても美しく何処か神秘的だった

そんな彼女の願いは自分に叶えられるのなら全て叶えてあげたいと思う風に。
だが、次の瞬間発せられたのは予想外な言葉だった

「死んでくれないかな？」

そう言つた彼女の背中から漆黒の翼が現れ自分の腹には光の・・・槍・・・が
「な・・・んで・・・」

「ごめんなさいね？ 怨むんだったら好きだけ恨んで頂戴。貴方にはその権利があるんだから」

「後貴方との恋人の真似事割と楽しかったわ。今日のデートも王道過ぎて恋愛経験が簡単に分かる程だったけど・・・ホントごめんなさいね平和に生きてた貴方をこつちの都合で殺したりしちゃって」

「そう言う彼女の彼女の顔はととてもとても悲しそうに歪んでいた。「もう駄目：だ：意識が・・・）」

視界が黒く閉ざされる直前に見えたのは見覚えのある独特な金と視界を覆う程の赤黒く染まった杭だった。

【イツセーside out】

【レイナーレside】

「死んでくれないかな？」

そう言った私は彼の体に向かって光の槍を放つ。

「・・・いくら任務の為とは言え単なる一般人である子供を殺すなんてホント嫌になるわね。」

殺す為に色々調べたが、彼は本当に平和な世界に生きて平和に過ごしてた。ちよつ

と……いやかなり煩惱に染まっているが顔も悪くないし性格もかなりの善人だ。神滅具なんて宿って無かつたら幸せな人生を送っていただろう

「この子が悪人だつたらどれだけ楽だったか……こんな子に神滅具を宿らせるなんて本当神つてのは歪んでるわね」

そう思い立ち去ろうとした瞬間

「もうちよいゆつくりしていきなよお嬢さん」

そんな言葉と共に視界を覆い尽くす杭。そして下にはその杭を出現させたであろう漆黒の貴族服を纏った青年であつた

〔レインナーレ side out〕

夕暮れ時の公園本来ならばの小学生や、その子供達を迎えに来た保護者や公園デートをするカップルなどで賑やかなのであろうが今は静寂そのものであつた。そして、その場にいるのは2人……だが、その2人は現代日本の地方都市の公園ではかなり浮いていた

片や漆黒の貴族服を身に纏い薄い金の髪を伸ばし、槍を持った長身の男

片や体のラインが強調される・・・所謂ボンテージと呼ばれる服を漬けその背中からは黒い羽が生えていた

「・・・なに貴方?」

「まあ、そんな警戒すんなよアンタらのデートプランを適当に考えてやった恋のキューピットつて奴だよ」

「あら、それはありがとう。それで? 何の用かしら? 私は自称管理人が来る前に撤退したいんだけど?」

「ああ、それは済まんね。あの日本神話に許可も取らずに勝手に居座わり自分の土地だと勝手に宣言してる癖に墮天使が侵入してもなんも気付かない竹島や尖閣諸島もびつくりな自称管理人が来る前には終わらせるよ」

「・・・いや当たってるけども中々にえぐい言い方するわね貴方。それで3回目だけでも何の用なの?」

「用は無い」

「はあ?」

「ただド変態なクラスメイトに告ったという中々趣味の悪い女の顔を見ようと思つて来てみたらこうなつてただけさね」

「趣味が悪くてごめんなさいね。じゃあ、用がないなら私は行くわよ？」

「Hasta luego, amigos. !」

「ええ、また会いましょう？」

そうして彼女が消えた次の瞬間に紅い魔法陣が現れる

「チツ、面倒臭え」

そして彼も霧となり消えていった

第3話

「ただいま〜つと」

彼がいるのは彼の日本での家（※衛宮邸を想像してください）

離れもあり蔵もあるし道場もある立派な武家屋敷である

「あら、おかえりなさい」

「出迎えご苦労オル姉」

「アホ」「いだア!？」

バキつと彼の頭を叩く彼女はオルタ・デイウォーカー・ジャンヌ（18）

霧仁の2つ上の姉である。因みに彼女は平行世界のifのジャンヌ・ダルクでもある

（簡単に言えばA p o c r y p h a のジャンヌオルタV e r .）

「何も殴る事無いじゃんか」

「ムカつかせたあんたが悪い」

「(・ω<) テへペロ」

「吠え立てよ、ラ・グロンドメント」

「すいませんデユヘルのだけは勘弁して下さい」 土下座

「分かればよろしい」

「さつきから騒がしいぞ貴様ら」

「あ、アル姉ただいま」

「あらそんなに騒がかった？」

「ああ、おかえり」

そして、少なくとも道場までは聞こえてたぞ」

「あー確かにそれは騒がしいわね」

騒がしいと注意してきたのがオルタ・デイウオーカー・アルトリア（18） B73／

W5 「切るぞ？」 アツハイ

オル姉と同じ平行世界のアーサー王非情に徹してきた姿

私めの姉で俺の取っていたハーゲンダッツを勝手に食べた俺の奢りで買ったDr

Pepperを不味いと言ったり（作者は好きです）と暴君なのですわ。王は人の心

がわからない・・・私は悲しい（ポロロン

因みに慈善団体で活動するCV諏訪部な一つ年上の彼氏がいる

「んじゃ風呂入ってくる」

「夕飯は後10分位でできるからな」

「りよーかい」

「おや霧仁、いつの間に帰って来てたんですか」

「ついさっきー」

彼は霧仁の兄

ガウエイン・デイウオーカー・フィリア（20）

ここでは無い世界の太陽の騎士ガウエインの生まれ変わりであり、
約束された勝利の剣の姉妹剣である転輪する勝利の剣の担い手である。

性格は相手を軽んじる事も侮辱する事もなく、相手が力量不足であってもその戦意、
覚悟をくみ取り、礼節をもって相對する。

王の前では影に徹し、ひとたび号令が下れば颯爽と戦場に赴き、涼やかな笑顔で勝利
すまさに理想の騎士なのだが、料理のレパートリーがじゃがいもをすり潰しただけの物

だけとかロリ巨乳が好みだったり兄弟間の借金でも取り立てに聖剣を出してくる上に日中は身体能力が3倍近く上がる為ゴリラという渾名を付けられてるなど色々残念なイケメンである

「そうですか。では今から湯浴みに？」

「そうだよー」

「後少しで夕飯が出来ますので早めに上がって下さいねー」

「おー」

【風呂場】

「ふふんふんふんふんふんふんふんふーん♪」

俺は古き良きあの日本人なら風呂に入る時必ず一度は歌った事はあるであろう歌を口ずさみながら着替えを籠にいられていく

そして浴場に入るとそこにいたのは・・・ローマであった

「おお霧仁さつきに入ってるぞ」

顔はイケメンなのにそのふくよかな体でなんか色々惜しいカエサル叔父さんガイウス・ユリウス・カエサルの魂を持つ

「おお！兄者おかえりなのだ！背中を流そうか？」

このアホの子っぽいB83/W「兄者!？」とスタイルが無駄に良いのがネロ・デイウォーカー・クラディウス俺の妹である

「おか、えり、き、りひと」

「ただいま」

この蒼髪に喰種の様な黒目に赤の瞳をしたのが叔父のカリギユラ
通称叔父上

そして最後に・・・

「よくぞ帰ってきた霧仁よ私は霧仁ローマの帰りを我が家ローマで待つてるぞ」

ローマである（錯乱）